

取り残されたアスベスト鉱山の労働者たち（フォトエッセイ）

著者	桜木 武史
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	188
ページ	32-35
発行年	2011-05
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00004245

アスベストは様々な鉱石の一部分に層をなしている

アーンドラ・プラデーシユ州の南に位置する小さな町、カタパ。
四〇年以上前からこの町では
アスベスト鉱山の採掘が盛んに行われていた。
しかし、アスベストへの健康被害が世界各地で報告されるにつれ、
その影響はインドでもまた大きな波となって押し寄せた。

■ フォトエッセイ ■ **取り残された
アスベスト鉱山の労働者たち**

写真・文 **桜木 武史**
Takeshi Sakuragi



地中から運ばれた鉱石をよりわかる鉱夫

編集部注

アスベスト（石綿）は、天然にできた鉱物繊維で「せきめん」「いしわた」とも呼ばれる。蛇紋石族と角閃石族に大別され、以下の6種類がある。

- ・蛇紋石族：クリソタイル（白石綿）－
ほとんどすべての石綿製品の原料として使用されてきた。世界で使われた石綿の9割以上を占める。
- ・角閃石族：クロシドライト（青石綿）、アモサイト（茶石綿）、アンソフィライト石綿、トレモライト石綿、アクチノライト石綿

石綿は、極めて細い繊維で、熱、摩擦、酸やアルカリにも強く、丈夫で変化しにくいという特性を持っていることから、建材、摩擦材、シール断熱材といった様々な工業製品に使用されてきた。

しかし、肺がんや中皮腫を発症する発がん性が問題となり、現在日本では、原則として製造・使用等が禁止されている。

(独立行政法人環境再生保全機構のウェブサイト
<http://www.erca.go.jp/asbestos/what/whats/>より)



ラジャスターン州のウダイプールでアスベスト鉱山で働いていた労働者。彼らは現在、アスベスト症、胸痛、空咳、息切れなどの症状に見舞われている



アスベストをドリダ
ス鉱夫が穴を開け
からす盤に切り崩
中から岩盤を切り
掘り出すイナマイ
ト



採掘された鉱石から不純物を取り除き精製されたアスベスト

カダパにある一〇を超える鉱山は現在では二つを数えるまでになった。それでも完全閉鎖にまでは至っていない。その理由として、カダパで採掘されるアスベストの種類はクリソタイルと呼ばれ、このタイプは健康被害が少なくと報告されているため、それを盾に採掘を継続させている。しかし、二〇〇六年にはクリソタイルも有害指定され、中央政府によって鉱山の閉鎖を命じられた。私が訪れたサイババ鉱山と呼ばれるアスベスト鉱山は、そんな中央政府の命令に従う様子もなく平然と採掘を行っている。なぜなのか。それは鉱山の経営者が州知事の従兄弟だからである。所有者が有力者であるため政府も黙認しているのである。

一九七四年から稼働しているサイババ鉱山には五〇名の労働者がいる。そのうち三〇名が鉱山での採掘に従事している。アスベストは地表からではなく地中で採れる。ダイナマイトで岩盤を破壊し、鉱石をトロッコに積み込み、地上に運ぶ。鉱石にはアスベストの他にも雲母、ドロマイト、石鹼石などが混じっているため、それらをより分けるのは女性の仕事である。朝八時から夕方五時まで計九時間の労働で得られる賃金は一五〇ルピーから一七五ルピー。日本円に換算してわずか三〇〇円足らずである。鉱夫の一人、プラ・レディ（四〇）は賃金に関しての不満を口にしながらもこう呟く。

「この賃金で家族を養うのは無理だよ。でもこの鉱山を離れても他の仕事にありつけるわけじゃない。我々の村では鉱夫か農夫か、選択できる職業は二つだけなんだ」

アスベストへの健康被害を尋ねると、どの鉱夫もまるで関心がないように見えた。エンジンアをしているマブ（三五）は「この周辺のアスベスト鉱山はほとんど閉鎖されている。健康被害がどうであろうと、我々は鉱山で働いてお金を稼いでいるんだ。閉鎖されたら俺たちはどこで働けばいいんだ」と健康より職場を優先した言葉を口にしていた。

しかし、年々、アスベストに対する風当たりは強くなる一方である。NGOやメディアがアスベストの有害性を指摘し、それが徐々に市民の意識のなかで定着しつつある。



地下で採掘された鉱石は
ドロップコによって地上へ
と運ばれる



「近いうちアスベスト鉱山はカダパから姿を消すだろう。カダパにある州政府の鉱山担当者はそう私を前に呟いていた。

かつて三〇以上のアスベスト鉱山が各地に点在していたラジャスターン州。しかし、一九八六年にMLP C (Mine Labour Protection Campaign) の活動家によりアスベストの健康被害が報告されると、鉱山の数は減少、一九九六年にはテクニカル・バンが中央政府を通して施行された。テクニカル・バンとは期限切れを迎えたアスベスト鉱山は更新手続きを踏めないという法律である。そして二〇〇二年には全ての鉱山が閉鎖されることとなった。ウダイプールから七五キロの場所にアスベスト鉱山が密集している地区がある。オーグナー地区では多くの村人が鉱夫としてアスベストと接してきた。七時間から一〇時間の労働で得られる賃金は一ルピーから五ルピー。一九八〇年から二〇〇〇年前後、その額は変わることはなかった。労働者はミーナと呼ばれる先住民が大半で、彼らは何も分からないまま仲介者を通して鉱山に派遣された。徐々に閉鎖されていく鉱山。経営者は労働者だけを残して姿を晦ました。現在、その労働者たちの多くが健康被害を訴えかけている。

アスベストの繊維一本の太さは髪の毛の五〇〇〇分の一程度と非常に微細である。アスベストを吸引すると肺に粉塵が沈着し、その刺激により線維化が起こる。やがて硬化した肺は換気機能が低下し、胸痛や呼吸困難などを引き起こす。石綿肺と呼ばれる塵肺症の一種である。鉱夫に限らず、その周辺に住む村人も被害をこうむる。なぜならアスベストは軽いため浮遊粉塵として空气中を漂うからである。



6年間、ウダイプールのアスベスト鉱山で働いていたケス・ラル (45)。1日8時間働いて、賃金はたったの5ルピー。「奴隷のように扱われたんだ」。彼はそう言うと、息苦しそうに咳き込んだ



砕かれた鉱石からアスベストとその他の鉱石をより分ける女性の鉱山労働者

アスベストによる健康被害を訴えかけるが中央政府、州政府は鉱夫への補償には消極的である



さくらぎ たけし/ジャーナリスト

インドとアフガニスタンを中心に取材を続ける。これまでサピオ、アエラ、国際協力、アジ研ワールド・トレンド、軍事研究に掲載。近著に『戦場ジャーナリストへの道—カシミールで見た「戦闘」と「報道」の真実』（彩流社）がある。

私が訪れたオーグナ地区は貧しい。適切な検査、治療も受けられない塵肺症の村人が多くいる。ウダイプル地方だけで約四〇〇〇人、ラジャスターン全土では一〇万人以上の被害者がいるとMLPCの代表者、ラナ（三三）は答える。現在も被害者は保障を求めて中央政府と争っているが、決着のめどは立たない。その間にもアスベストによる死者は増え続けている。

私が訪れたオーグナ地区は貧しい。適切な検査、治療も受けられない塵肺症の村人が多くいる。ウダイプル地方だけで約四〇〇〇人、ラジャスターン全土では一〇万人以上の被害者がいるとMLPCの代表者、ラナ（三三）は答える。現在も被害者は保障を求めて中央政府と争っているが、決着のめどは立たない。その間にもアスベストによる死者は増え続けている。

「アスベスト鉱山の閉鎖は喜ばしいことだが、まだ我々にはやらなければいけないことがある。それがアスベストのUse（使用）、Trade（貿易）、Manufacture（製造）を禁止することだ。しかし、アスベスト業界は企業と政治家の縄張りであり、なかなか手を出すことができない」

鉱山が閉鎖された今、インドはアスベストをカナダとロシアから主に輸入をしている。年間一〇万トンにも上り、年々、その量は増え続けている。しかし、カダパの鉱山が州知事の従兄弟が経営しているように、アスベスト関連の企業のいくつかは政治家が所有している。そのためアスベストの全面的な禁止に政府は消極的である。

オーグナ地区を含めた周辺の鉱山地区で国の職業病を扱う機関、NIOSH（National Institute of Occupational Health）が五年前に鉱夫一六九名を対象に検査を実施した。その結果、九三名、約五五％の人々が塵肺症だと認定された。しかし、この結果は公表されず、中央政府も頑なにアスベストと健康被害との因果関係を否認している。

BANI（Ban Asbestos Network India）のメンバー

であるゴパル・クリシュナ（三八）はアスベスト被害

者の救済に一〇年余りの歳月を費やしている。そして

彼はこう指摘する。